2021 年度　教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部　学科	職位	氏　　名
人間健康学部 人間健康学科	教授	大勝 志津穂
最終学歴	学　位	専門分野
中京大学大学院体育学研究科博士課程単位取得退学	博士（体育学）	スポーツ社会学

Ⅰ　教育活動

○目標・計画

（目標）

本学における「三つの言葉」（建学の精神／校訓／教職員の心構え）を念頭に置き、昨年度の反省を活かしながら、オンライン授業では、動画と資料を提示しつつ、レポート課題の評価を見える化するためのルーブリックを活用し、学生自身に目標と到達点を把握させる。

演習活動では、可能な限り対面での実施を行い、学生間の意見交換、コミュニケーションを図る。

（計画）

オンライン授業のための動画、配布を新たに作成する。

レポート評価のルーブリックを修正・改善する。

演習活動で実施するワークショップの方法を習得し、実践する。

○担当科目（前期・後期）

（前期）

東邦プロジェクトB、スポーツ社会学、障害者スポーツ論、レクリエーション論、地域とスポーツ、教採対策特講、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

（後期）

東邦プロジェクトA,スポーツ原理、生涯スポーツ論、レクリエーション実技、教採対策特講、総合演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ

○教育方法の実践

classroomを利用し、事前事後の課題提示を行い、ルーブリックに従い毎回課題を評価し返却した。課題については、修正箇所や評価できない内容について個別に指摘コメントを行い、返信があった場合には個別に対応を行った。

対面で実施できた授業においては、可能な限り学生同士のディスカッションを増やし、自らの考えを伝え、相手の考えを聞きながら課題をまとめられるようにした。

○作成した教科書・教材

各授業での提示資料の作成を行った。

髙橋徹編著　みらいスポーツライブラリー　スポーツ文化論第9章「ジェンダーとスポーツ」を執筆した

。

○自己評価

今年度は昨年度の反省を踏まえ、オンデマンド授業の配布資料の質を高めることができた。これまで同様に、毎時間の課題についてはその都度返却し、学生自身が自分の状況を把握できるように

した。後期の授業の多くは制約がある中でも、対面で授業が実施できたため、学生同士のディスカッションの時間も作ることができ、授業の流れにメリハリをつけることができた。

総合演習では、ワークショップ形式のグループ活動を取り入れ、社会課題について学生自ら考える授業を行うことができた。これについては次年度も継続して実施していきたい。専門演習については、卒業論文作成に向けて、３・４年生合同のプロポーザル発表、中間発表、最終発表を実施することができた。３・４年生を合同で実施することにより、3 年生には卒業論文に対する意識づけを行うことができ、4 年生には自覚を持たせることができたのではないかと思っており、これについても継続していきたい。

Ⅱ　研究活動

〇研究課題

スポーツ弱者のスポーツ環境整備に関する研究

〇目標・計画

（目標）

口頭発表１回以上、査読付論文１本以上、科研費あるいは外部資金の獲得を目指す。

（計画）

研究日や夏季・春季休暇期間を利用して、研究活動を行う。具体的には、9 月の学会での口頭発表を皮切りに、査読付き論文の投稿を積極的に実施し、研究助成への応募を行う。

〇2014 年 4 月から 2022 年 3 月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

・ 髙橋徹編著みらいスポーツライブラリー　スポーツ文化論第 9 章「ジェンダーとスポーツ」執筆担当．株式会社みらい　pp. 122-137．2022 年 3 月 25 日
・ 手嶋慎介・大勝志津穂第１章「スポーツボランティアに関わる人材育成-参加者と運営側の 2 つの視点から」執筆担当　『地域が求める人材』愛知東邦大学地域創造研究所叢書　唯学書房 pp. 3-9．2019 年 3 月 31 日
・ 川西正志・野川春夫編著改定第 4 版　生涯スポーツ実践論−生涯スポーツを学ぶ人たちに−12 章スポーツクラブの現状と課題　［3］全国的な総合型クラブの管理運営組織の現状　執筆担当．pp. 197-202. 2018 年 4 月 30 日
・ 日本スポーツとジェンダー学会編者「データでみる　スポーツとジェンダー」3　生涯スポーツとジェンダー 2）～4）スポーツ推進委員、（公財）日本体育協会公認スポーツ指導者、健康運動士・健康運動実践指導者、（公財）日本レクリエーション協会公認指導者、コラム 2、コラム 3 執筆担当．八千代出版株式会社　p. 50、pp. 52-61．2016 年 7 月 2 日
・ 大勝志津穂・長谷川望・藤重育子・高間佐知子・小柳津久美子・手嶋慎介・宮本佳範・河合晋「学内外における実践活動を通じた人材育成の可能性」第 6 章執筆担当　『学生の「力」をのばす大学教育−その試みと葛藤』　愛知東邦大学地域創造研究叢書 No. 22　唯学書房　pp. 52-62．2014 年 11 月 10 日
・ 大勝志津穂・長谷川望・藤重育子・高間佐知子・小柳津久美子・手嶋慎介・宮本佳範・河合晋「大学における運動部活動を通じた人材育成−ライフスキル獲得に着目した取り組み」第 1 章執筆担当　『学生の「力」をのばす大学教育−その試みと葛藤』　愛知東邦大学地域創造研究叢書 No. 22 唯学書房　pp. 3-9　2014 年 11 月 10 日

（学術論文）

- 大勝志津穂・木村華織「東京 2020”女性蔑視発言”の追跡調査から考えるスポーツ界のジェンダー平等」2022 年 3 月　スポーツとジェンダー研究 20
- 大勝志津穂「成人の多様な運動・スポーツ実施促進条件に関する社会学的研究-実施経験のジェンダー差に着目して-」中京大学体育学研究科博士論文．2019 年 12 月．
- 大勝志津穂「うるぎトライアル RUN ボランティア参加者の意識調査-期待度と満足度の比較」2018 年 6 月　東邦学誌第 47 巻第 1 号：pp. 137-144.
- 大勝志津穂・來田享子「成人期以降の集団球技系種目実施者における過去の同一種目経験の影響-笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査 2012」データの二次分析を中心に」2017 年 3 月　生涯スポーツ学研究 13（2）：pp43-54.（査読有）
- 大勝志津穂「マラソンイベント開催による村の地域活性化に関する研究-うるぎトライアル RUN 参加者の支出による検討-」2017 年 6 月　東邦学誌 46（1）：pp. 39-48.
- 大勝志津穂「うるぎトライアル RUN 完走者の大会評価-大会満足度と自由記述のテキスト分析による検討-」2017 年 12 月　東邦学誌 46（2）：pp. 177-186.
- 大勝志津穂「運動・スポーツ種目の実施率の男女差について-実施率の時系列変化に着目して-」2015 年 3 月　スポーツとジェンダー研究 13：pp. 56-65.（査読有）
- 大勝志津穂「平成 26 年度スポーツライフ・データ 2014（SSF 笹川スポーツ財団）-運動・スポーツ実施レベル別の実施状況-」2015 年 9 月　体育の科学第 65 巻第 9 号
- 中山孝男・手嶋慎介・大勝志津穂・正岡元・小柳津久美子「2012 年度共同研究：(研究課題)「iPod touch/iPad を利用した教育手法の開発と研究」活動成果報告」2014 年 12 月　東邦学誌第 43 号第 2 号：pp. 127-139（共著：執筆担当 pp. 130-131）.
- 大勝志津穂「愛知県における成人女性サッカー選手のスポーツ経験種目に関する研究」2014 年 3 月　スポーツとジェンダー研究 12：pp. 31-46.（査読有）

（学会発表）

- 大勝志津穂「コロナ禍における社会調査」第 31 回日本スポーツ社会学会学生企画シンポジウム 2022 年 3 月
- 大勝志津穂・松宮智生・藤山新・伊東佳那子・高峰修・建石真公子・田原淳子・來田享子「体育・スポーツにおける多様な性のあり方-基礎知識と体育・スポーツ場面での課題-」（公財）日本スポーツ協会指導者講習会　2022 年 2 月
- 大勝志津穂・木村華織「東京 2020”女性蔑視発言”の追跡調査から考えるスポーツ界のジェンダー平等-統括団体及び競技団体の調査結果」2021 年 10 月　日本スポーツとジェンダー学会第 20 回大会 研究企画②
- 大勝志津穂「コロナ禍における若年層の運動・スポーツ実施の変化～スポーツの実施状況等に関する世論調査の結果より～」2021 年 10 月 日本生涯スポーツ学会第 23 回大会
- 大勝志津穂「コロナ禍における運動・スポーツの取り組み-with コロナにおける運動・スポーツの関わり方とは？-」2021 年 10 月　立教大学公開講演会
- 大勝志津穂「地域スポーツクラブとは」令和 3 年度愛知県広域スポーツセンター事業アシスタントマネジャー養成講習会　2021 年 7 月
- 大勝志津穂・松宮智生・藤山新・伊東佳那子・高峰修・建石真公子・田原淳子・來田享子「体育・スポーツにおける多様な性のあり方-基礎知識の提供・プロジェクト調査結果-」（公財）日本スポーツ協会指導者講習会　2021 年 2 月
- Shizuho Okatsu 「Current Situation and Challenges of ″Sport for All″」2021 年 3 月 24 日

-26 日 Sport for Women's Empowerment & Employment, Special Session

- 大勝志津穂「コロナ禍における運動・スポーツ実施状況-ジェンダー差は生じているのか？-」2020 年 10 月　日本スポーツとジェンダー学会第 19 回大会　ワークショップ
- Shizuho Okatsu「What is needed in sports in Japan to support LGBT athletes? : Based on the results of questionnaire survey of instructors and JSPO organizations」2020 年 9 月 8 日-22 日　Yokohama Sport Conference 2020
- 大勝志津穂「運動・スポーツ実施における同伴者の変化について-スポーツライフに関する調査 2008・2018 の二次分析-」2019 年 8 月　日本生涯スポーツ学会第 21 回大会
- 大勝志津穂・藤山新・松宮智生・伊東佳那子・高峰修・建石真公子・田原淳子・來田享子「スポーツ団体におけるジェンダー・セクシュアリティに関わる課題への取り組みの現状」2019 年 6 月 日本スポーツとジェンダー学会第 18 回大会
- 大勝志津穂・武長理栄「学校運動部活動の種目別活動実態と生徒の希望活動状況-12～21 歳のスポーツライフに関する調査 2017 の 2 次分析-」2018 年 8 月　日本体育学会第 69 回大会
- 大勝志津穂・高峰修・伊東佳那子・建石真公子・田原淳子・藤山新・松宮智生・來田享子「性的マイノリティの人権に配慮したスポーツ指導環境の構築にむけた調査報告(1)」2018 年 7 月　日本スポーツとジェンダー学会 第 17 回大会
- 大勝志津穂・來田享子「現在のスポーツ実施種目に影響する要因-過去のスポーツ経験に着目して-」2016 年 8 月　日本体育学会第 67 回大会
- 大勝志津穂・來田享子「女性のサッカー人口増加の背景を探る」2015 年 8 月　日本体育学会第 66 回大会
- 大勝志津穂・來田享子「成人男女の実施種目とスポーツ活動歴との関係-スポーツライフ・データ 2012 の二次分析より-」2014 年 8 月　日本体育学会第 65 回大会
- 大勝志津穂「運動・スポーツ種目の実施率の男女差について-実施率の時系列変化に着目して」2014 年 6 月　日本スポーツとジェンダー学会第 13 回大会

（その他）

- 大勝志津穂「体育・スポーツにおける多様な性のあり方-基礎知識と体育・スポーツ場面での課題-」（公財）日本スポーツ協会 e-learning 教材　2021 年
- 來田享子・大勝志津穂・高峰修・建石真公子・田原淳子・藤山新・松宮智生・伊東佳那子「体育・スポーツにおける多様な性のあり方ガイドライン　Guidelines on Optimal Sexual Diversity in Physical Education and Sport（二か国語版）」発刊．2020 年 9 月．公益財団法人日本スポーツ協会.
- 來田享子・大勝志津穂・高峰修・建石真公子・田原淳子・藤山新・松宮智生・伊東佳那子「体育・スポーツにおける多様な性のあり方ガイドライン」発刊．2020 年 2 月．公益財団法人日本スポーツ協会.
- 大勝志津穂「中学生・高校生の学校運動部活動の活動実態-ガイドライン制定後の変化-」2019 年 12 月．子ども・青少年のスポーツライフ・データ 2019-4 歳～21 歳のスポーツライフに関する調査報告書-．pp.40-46.
- 大勝志津穂「スポーツ指導に必要な LGBT の人々への配慮に関する調査研究-第 2 報-スポーツ団体のジェンダー課題等への取り組みについて」2019 年 3 月．日本体育協会スポーツ医・科学研究報告Ⅰ　pp.30-41.
- 大勝志津穂・來田享子「中央競技団体が取り組む女性のスポーツ振興戦略に関する基礎的研究」2019 年 3 月．中京大学体育研究所紀要 33:pp.83-88.

- 大勝志津穂「誰と運動やスポーツを実施しているのか？」2018 年 12 月．スポーツライフ・データ 2018-スポーツライフに関する調査報告書．pp. 32-37.
- 大勝志津穂「スポーツ指導に必要な LGBT の人々への配慮に関する調査研究−第 1 報−第 7 章「日体協指導者資格保有者の経験と課題〜「スポーツ指導者に求められる指導上の配慮に関する調査について」〜」 7－1 調査概要及び単純集計結果．2018 年 3 月．日本体育協会スポーツ医・科学研究報告Ⅰ.
- 大勝志津穂「中学校・高等学校の学校運動部活動の活動実態：種目別による比較」2017 年 12 月．子ども・青少年のスポーツライフ・データ 2017−調査報告書：pp. 43-48.
- 大勝志津穂「現在の実施種目からみる過去のスポーツ経験と今度の希望」2016 年 12 月．スポーツライフ・データ 2016-スポーツライフに関する調査報告書：pp30-34.
- 大勝志津穂・來田享子「現在のスポーツ実施種目に影響する要因−過去のスポーツ経験に着目して−」2016 年 8 月．日本体育学会第 67 回大会体育社会学専門領域発表論文集 24 号：pp. 72-77.
- 大勝志津穂「子どもの運動・スポーツ実施とジェンダー〜高頻度（週 7 回以上）実施者の特徴〜」2015 年 12 月　青少年のスポーツライフ・データ 2015-10 代のスポーツライフに関する調査報告書：pp22-27.
- 大勝志津穂・來田享子「女性のサッカー人口増加の背景を探る」2015 年 8 月　日本体育学会第 66 回大会体育社会学専門領域発表論文集 23 号：pp. 147-152.
- 大勝志津穂・來田享子「成人男女の実施種目とスポーツ活動歴との関係−スポーツライフ・データ 2012 の二次分析より−」2014 年 8 月　日本体育学会第 65 回大会体育社会学専門領域発表論文集 22 号：pp. 24-29.
-

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

科学研究費「外国籍及び外国にルーツを持つ青少年のスポーツ環境に関する基礎的研究」申請

○所属学会

日本体育・スポーツ・健康学会
日本スポーツとジェンダー学会
日本生涯スポーツ学会
日本スポーツ社会学会
東海体育学会

○自己評価

今年度は口頭発表を 1 回実施できたが、査読付き論文の執筆までには至らなかった。しかし、学会においてシンポジウムや研究会での発表、講習会での講師など多くの専門家や一般の人に知識をアウトプットできたことは評価できる。また、e-learning 教材を作成したり、新たなテキストの執筆も行ったりすることができ、新たなことに挑戦できた。

Ⅲ　大学運営

○目標・計画

（目標）

中高教職課程委員会委員長として、①教員免許取得に向けた支援を滞りなく実施する、②教員採用試験の合格に向けた支援を行う。

（計画）

１年間の月別スケジュールを提示し、委員に全体の流れを把握させる。

学年担当者制を用いて、各学年担当委員がスケジュールに基づき滞りなく支援が行えるようにする。

教員採用試験対策特別講座を実施する。

○学内委員等

人間健康学部執行部（入試判定会議）

教職支援センター運営委員会副委員長（教職支援センター副センター長）

中高教職課程委員会委員長

地域スポーツ・文化クラブ運営委員会

女子サッカー部部長

人間健康学部カリキュラム再編 WG

人間健康学部２年生活動支援企画 GP

○自己評価

中高教職課程委員会委員長及び教職支援センター運営委員会では、教員免許取得の支援について円滑に業務を進めることができた。しかし、中高教職課程委員会として学生の単位修得状況の確認不足により、突発的な対応をすることになった。次年度は組織としての体制を整備し、個人だけでなく組織として学生支援に取り組みたい。

地域スポーツ・文化クラブ運営委員会では、これまで様々な議論を重ねてきたが、最終的に明確な形を残すことができず残念であった。

学部業務では、執行部での業務、入試判定会議を滞りなく進めることができた。また、学部再編について若手教員と知恵を絞り、カリキュラム再編について取り組むことができた。

Ⅳ　社会貢献

○目標・計画

（目標）

地域住民のためのスポーツ環境の提供

広く一般の方々に向けた研究成果の情報発信

（計画）

これまで継続してきた愛知県サッカー協会、東尾張サッカー協会などと連携したスポーツ教室を開催する。

日本スポーツ協会、愛知県スポーツ協会主催の講演会、セミナーによる情報発信を行う。

○学会活動等

日本体育・スポーツ・健康学会政策検討・諮問委員会委員

日本スポーツとジェンダー学会理事、日本スポーツとジェンダー学会編集委員

笹川スポーツ財団「SSF スポーツライフ調査委員会」委員

日本スポーツ協会スポーツ医・科学委員会研究班員

中京大学先端共同研究機構体育研究所特任研究員

愛知東邦大学地域創造研究所所員

鹿屋体育大学人文・社会科学系倫理審査小委員会委員
名古屋市瑞穂公園陸上競技場整備等事業アドバイザー業務委託に係るプロポーザル審査委員会委員
愛知県サッカー協会女子委員会財務担当・総務委員会東尾張担当
東尾張サッカー協会役員

○地域連携・社会貢献等

日本スポーツ協会研究員として、性的マイノリティの人々に対するスポーツ環境の整備に関する研究に従事し、講習会の実施や e-learning 教材の作成などに積極的に取り組んだ。

兵庫県スポーツ指導者協議会より、「スポーツにおける多様な性のあり方」研修会の講師を依頼されたが、蔓延防止が発令されたため中止となった。次年度に再度実施する方向で調整している。

愛知県広域スポーツセンターより、アシスタントマネジャー養成講習会の講師を依頼され、「地域スポーツクラブとは」の講座を実施した。

名古屋市より名古屋市瑞穂公園陸上競技場整備等事業アドバイザー業務委託に係るプロポーザル審査委員会の委員を委嘱され任務を行なった。

立教大学より立教大学の教職員及び一般の方々への公開講習会の講師を依頼され、「コロナ禍における運動・スポーツ実施の変化」について講演を行った。

愛知県サッカー協会女子委員会役員、東尾張サッカー協会役員として女子サッカーの普及、スポーツ団体のガバナンスの課題に取り組んだ。

秋田県立秋田南高校の総合的な探求の時間「国際探求」のフィールドワークを受け入れ、オンラインで生徒の質問に答えた。

○自己評価

今年度はコロナ禍であったが、女子サッカーの普及事業を愛知県サッカー協会、東尾張サッカー協会との連携、さらに女子サッカー部の協力のもと実施することができた。この事業については、多くの小学生が参加してくれており、定着事業として認識されるようになってきているので、このまま継続していきたい。また、愛知県サッカー協会女子委員会では、財務委員長として女子委員会の会計業務に携わり、協会の運営に協力した。

また、コロナ禍で定着したオンライン講習会において、多くの人に情報を発信することができた。さらに、今年度は、名古屋市からの業務委託や他大学の倫理審査に関わるなど新しいことに取り組むことができた。次年度も名古屋市や愛知県との継続事業もあるので、愛知県及び名古屋市のスポーツ環境の整備に貢献していきたい。

Ⅴ　その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

笹川スポーツ財団研究員として全国調査に関わる。
日本スポーツ協会の受託研究において共同研究者と研究成果を共有する。
人権教育（平等や差別）の教材研究を行い、演習等で活用できるようにする。

Ⅵ　総括

授業では、メディア授業にも慣れた一方で、やはり対面授業の良さを感じた１年でもあった。メディア授業の良さを残しつつも、対面で実施することの良さも学生に伝えられるようにしていきたい。

研究では、口頭発表は行えたものの、査読つき論文を完成させることができなかった。アンケート調査が実施できず、データ収集ができないこともあったが、コロナ禍で変化した社会調査のあり方を考える機会もあり、今後はオープンデータを活用した二次分析での研究も積極的に進めていきたい。

大学運営においては、学部執行部として学部のことを考える１年であった。学生のモチベーションだけでなく、教員のモチベーションを上げ、大学運営及び学部運営に関わってもらうための方策を今後も考えていきたい。

以　上